東京大学医科学研究所
The Institute of Medical Science, The University of Tokyo

PRESS RELEASE

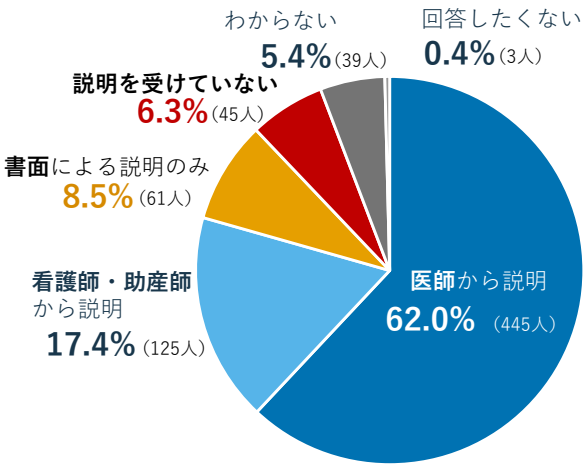
2026 年 11 月 27 日
東京大学医科学研究所

妊産婦にとって胎児超音波検査はどんな経験？
――出生前検査としての胎児超音波検査の倫理的課題を検討――

発表のポイント

- ◆ 妊産婦 1,236 人を対象とする質問紙調査と、胎児超音波検査を含む出生前検査を経験した女性 29 人へのインタビュー調査を実施し、日本における胎児超音波検査の受検経験と、その倫理的課題を検討しました。
- ◆ 質問紙調査では、胎児超音波検査を受けた、または受ける予定と回答した人の 8.5%は書面による説明のみだった、6.3%は事前の説明を全く受けなかったと回答しており、インタビュー調査でも十分な事前説明や、受検するかどうかを自ら考えて選択する機会がないまま検査を受けた経験が語られました。このことから、胎児超音波検査は出生前検査であるにも関わらず、標準的な妊婦健診の延長として受けられやすく、その説明、同意の過程に課題があることが示唆されます。
- ◆ 質問紙調査では、胎児超音波検査の経験を、約 8 割が肯定的に受け止めており、インタビュー調査では、胎児の姿を見る喜びや、医療者への信頼、胎児の健康・発育状態への不安に対処するための受検であったことや、受検によって今後の出産・育児の見通しを得られて安心したことが、肯定的評価の背景として語られました。一方で、肯定的に評価しながらも、出生前に胎児の状態を知ることの不安や葛藤があったことも語られており、受検による心理的・実際的な負担が妊婦に集中しやすいという課題も示唆されました。

胎児超音波検査を受ける前の説明



概要

東京大学医科学研究所研究倫理支援室の島﨑美空特任研究員、公共政策研究分野の三村恭子学術専門職員、武藤香織教授、同大大学院新領域創成科学研究科の永井亜貴子特任助教らの研究グループは、日本において、妊娠時に希望する方が任意で受検できる胎児超音波検査（注1）の受検経験と倫理的課題を調べるため、妊産婦1,236人へのオンライン質問紙調査と、胎児超音波検査を含む出生前検査(注2)を経験した女性29人へのインタビュー調査を実施しました。胎児超音波検査は、胎児の臓器や身体の構造を詳しく調べ、形態的な異常などの可能性を確認する出生前検査です。質問紙調査では、胎児超音波検査を評価した回答者の約8割が肯定的に受け止めていました。一方、インタビュー調査では、標準的な妊婦健診の一環として受け、胎児超音波検査を受検するかどうかを考える機会・時間がなかった人や、十分な事前説明がないまま受検し、胎児の異常が疑われて初めて検査の重要性を実感した人もいました。これらの結果から、胎児超音波検査が身体的負担の少ない、受けやすい出生前検査である一方、検査結果によっては、妊婦や家族が難しい判断を求められるというギャップがある可能性が示唆されます。研究グループは、妊婦が胎児超音波検査の意味を理解し、自らの価値観に沿って選択できる機会を保障するとともに、異常が疑われた場合にも十分な支援を受けられる体制を整えることが重要だと考えています。

本研究成果は、2026年11月18日付で、国際学術誌「*BMC Medical Ethics*」に掲載されました。

発表内容

〈研究の背景と方法〉

標準的な妊婦健診では、胎児の発育や妊娠経過を確認するために超音波検査が行われます。一方、胎児超音波検査は、胎児の臓器や身体の構造をより詳細に確認することによって、胎児の形態的な異常などの可能性を確認する目的で行われる、任意で提供される検査であり、出生前検査として位置付けられています。いずれの超音波検査も同じ検査技術が用いられる一方で、実施される目的は異なります。ただし、その違いが妊婦にとってはわかりにくい場合があります。そこで、妊娠20週以降または産後3か月未満の女性を対象とした質問紙調査で、胎児超音波検査への理解や事前説明の経験、受検経験を尋ねました（N=1,236）。さらにインタビュー調査では、2015年以降に出産し、かつ胎児超音波検査を含む出生前検査を経験した人に、受検の経緯や意思決定の背景、結果を知った後の経験を聞き取りました（N=29）。

〈主な結果〉

質問紙調査では、68.8%（850人）が通常超音波検査と胎児超音波検査の違いを認識していました。胎児超音波検査を受けた、または受ける予定と回答した718人のうち、62.0%（445人）は医師から説明を受け、8.5%（61人）は書面による説明のみ、6.3%（45人）は説明を受けていませんでした。胎児超音波検査を経験した786人のうち、80.5%（633人）が「よかった」「ややよかった」と回答しました。多変量解析（注3）では、書面のみによる説明を受けたと回答した人や、そもそも説明を受けていないと回答した人は、医師から説明を受けたと回答した人に比べ、胎児超音波検査経験を肯定的に評価する割合が低い傾向がみられました。

インタビュー調査では、胎児超音波検査経験に対する肯定的な評価の背景には、胎児の姿を詳しく見る喜びや医療者への信頼がありました。また、参加者は、胎児の健康・発育状態に問題ないかという不安や、胎児が疾患や障害を持って生まれてくる可能性への不安を感じており、その不安を軽くするためにできる選択として検査を受けた人もいました。たとえ、胎児超音波

検査を受けて異常が指摘されたとしても、出生後に治療できることがわかり、自分なりに対処できるという見通しを得たことも、肯定的な評価につながっていました。ただし、検査を受けてよかったという評価の中にも、異なる受け止めや割り切れない思いが語られました。十分な事前説明がないまま受検し、異常が疑われて初めて検査の重大さに気づき戸惑った人や、早期に胎児の状態を知ることで適切な医療につながる点を評価する人がいる一方、もし出生前に疾患や障害を知っていたら、妊娠を継続するかどうかの判断が変わっていたかもしれないと、胎児の状態を知ること自体に葛藤を感じた人もいました。

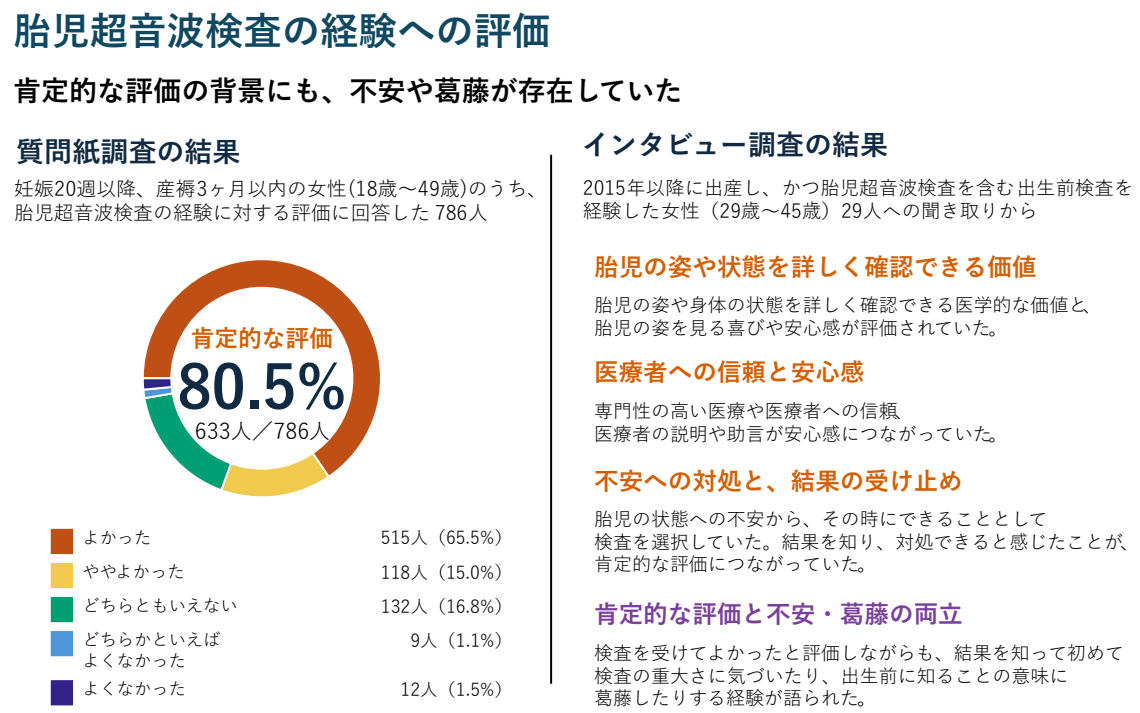


図１：胎児超音波の受検経験に対する評価と、その意味づけ

〈本研究の意義と限界〉

本研究は、質問紙調査によって受検経験や評価の傾向を把握するとともに、インタビュー調査によってその背景にある経験や意味づけを検討しました。胎児超音波検査は、異常を調べるだけでなく、妊娠・出産や育児の見通しを持ち、不安や不確実さに対処する手段としても経験されていました。両調査を組み合わせて胎児超音波検査の経験について検討した研究はまだ少なく、本研究は胎児超音波検査の肯定的な評価が持つ多様な意味を明らかにするとともに、その評価だけでは捉えられない、説明・同意や意思決定、検査後の支援に関わる倫理的課題を多面的に検討した点に意義があります。なお、調査対象は調査会社の登録者で、日本の妊産婦全体を代表するものではありません。回答は本人の記憶に基づいており、またインタビューには検査後に人工妊娠中絶を選択した人の経験は含まれていないことも本研究の限界として挙げられます。

本研究は東京大学医科学研究所倫理審査委員会観察研究等委員会の承認のもと実施されました。

発表者・研究者等情報

東京大学
医科学研究所
研究倫理支援室
島﨑　美空　特任研究員

附属ヒトゲノム解析センター　公共政策研究分野
三村　恭子　学術専門職員
武藤　香織　教授
兼：理化学研究所 生命医科学研究センター 生命医科学倫理とコ・デザイン研究チーム

大学院新領域創成科学研究科
永井　亜貴子　特任助教

論文情報

雑誌名：BMC Medical Ethics
題　名：Understanding women's experiences and ethical reconsiderations of fetal ultrasound screening as prenatal testing in Japan
著者名：Miku Shimasaki, Kyoko Mimura, Akiko Nagai, Kaori Muto*（*責任著者）
DOI：10.1186/s12910-026-01675-1
URL：https://doi.org/10.1186/s12910-026-01675-1

研究助成

本研究は、こども家庭庁の研究事業（課題番号：JPMH22DA2002）および科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）（課題番号：JPMJSP2108）の支援を受けて実施されました。

用語解説

（注 1）胎児超音波検査（胎児超音波スクリーニング）
超音波を用いて胎児の臓器や身体の構造を詳しく観察し、先天的な疾患や形態的な異常の可能性を確認する出生前検査です。通常の妊婦健診で行う超音波検査とは目的や確認する内容が異なります。ただし、標準的な妊婦健診で実施される超音波検査でも胎児の異常が見つかることがあり、両者は使用する技術も共通しています。

（注 2）出生前検査
胎児の健康状態や先天的な疾患・障害の可能性などを出生前に調べる検査の総称です。超音波検査のほか、妊婦の血液を用いる NIPT、羊水検査など、さまざまな種類があります。それぞれ調べられる内容や検査の限界、身体的な負担が異なります。

（注 3）多変量解析
複数の要因を同時に考慮し、それぞれの要因と結果との関連を調べる統計学的な方法です。本研究では、検査前の説明方法や胎児の異常の指摘の有無などを考慮し、検査経験に対する肯定

的な評価と関連する要因を検討しました。ただし、関連が認められても、原因と結果の因果関係を示すものではありません。

–

問合せ先

〈研究内容について〉
東京大学医科学研究所 附属ヒトゲノム解析センター 公共政策研究分野
教授　武藤 香織（むとう　かおり）
https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imsut/jp/lab/hgclink/section07.html

〈機関窓口〉
東京大学医科学研究所 プロジェクトコーディネーター室（広報）
https://www.ims.u-tokyo.ac.jp/